

建築家の構想する私的空間 -現代日本住宅からみた考察-

正会員 ○高田 祥平*¹
同 山田 深*²

9. 建築歴史・意匠-7. 意匠論

私的空間 現代日本住宅 構成 性質 用途 おひとりさま空間

1. 序

現代の建築設計において、「開く」や「つながり」といったテーマのもと、設計者が建築と都市との関係性や人々のコミュニケーションを強く意識することで、意図的に人々の集まる場所や利用する人々の関係性を計画することが多く行われている傾向がある。一方で、都市部では、「おひとりさま空間」^{1) 2)}が増加傾向にあり、半個室型の飲食店や娯楽空間などが数多く存在している。また、現代住宅においては、職住の一体化などにより、住宅における個人のための空間の捉え方も変化を遂げているのではないかと考えられる。そこで本研究では、建築家が現代住宅において個人のための空間（以下、私的空間とする）について、どのように捉え、構想しているのかを考察し、その広がりや変化について総体的に明らかにすることを目的とする。

2. 研究資料・方法

資料として、建築専門誌である『新建築』及び『新建築 住宅特集』から抽出を行う³⁾。また抽出された作品解説について、言説及び図面や写真から3つの側面(図1)についてKJ法⁴⁾により、分類考察を行う。三側面については、一般に建築家が建築を構想する際に考えられる、構成的側面および性質的側面といった2つの内容のほか、特に私的空間を構想するには利用者の空間利用などに関する用途的側面も考慮すべき内容として考えられる。よって、これら3つの側面より、建築家の住宅設計における私的空間の広がりを総体的に考察する。さらに年代ごとによる考察から、私的空間の年代別の傾向を明らかにする。また本研究では、個室空間などにみられる、物理的に閉じているものだけでなく、過ごし方や利

用の仕方を想定したような関係性を示しているものについても抽出を行う。よって抽出対象は、「個人が主観的な感覚で対相手を想定していない空間についての言及」および「1人での行為や機能についての空間の言及」とし、いずれかに該当する作品解説について抽出を行い、対象資料とする。

3. 私的空間の【構成的側面】

3-1. 【構成的側面】の分類

【構成的側面】から私的空間を構想しているものは161作品が該当した。また抽出された作品についてKJ法による分類をおこなった結果、[連続]、[転換]、[独立]、[相関]の4つのカテゴリーに位置付けられた。ここではその中から、[連続](50作品)について示す。分類より、福島和津也+富永祥子の「s-HOUSE」(図2)などにみられるような生活動線が連続する内部空間の中に私的空間を形成しているのがみられた(34-1, 102-2, 94-1)。また、藤野高志の「バードルフ映画図書館」(図3)などにみられるような、建築内はワンルームであるが、とても大きなスケールのため個人のパーソナルな領域を確保することができるのではないかと考えられることで、明確に空間が仕切られていることがなくても、私的空間が形成されている作品も複数みられた(26-2, 40-1, 50-1, 54-1, 75-2, 77-1, 109-2)。このことから、非

No.	作品名	設計者	掲載誌/年	分類
70	s-HOUSE	福島和津也+富永祥子	新建築 住宅特集 2007_03	(連続) (独立)

図2. s-HOUSE(70-1)

No.	作品名	設計者	掲載誌/年	分類
109	バードルフ映画図書館	藤野高志	新建築 住宅特集 2016_09	(連続) (集積) (快適性) (存心) (慮もる)

図3. バードルフ映画図書館(109-2)

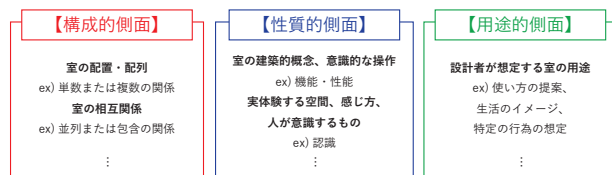


図1. 三側面の分類についての定義

Study on personal-space in housing thought by contemporary Japanese architects

TAKADA Shohei et al.

対人関係を想定した私的空間の形成については完全な間仕切りや壁などによる閉鎖的なものでなくても、1 人のためのスペースを確保しようとされているのではないかと考えられる。

3-2. 年代別考察

図 4 より [連続] の割合において増加の傾向がみられることから、私的空間の年代別傾向の 1 つとして、繋がりや関係性を意識した設計のなかで私的空間を創作している傾向がみられる。一方で、[独立]した空間構成については、私的空間を構成する内容としては減少の傾向があることが見てとれる。また [相関] や [転換] については年代的な傾向に顕著な変化はみられなかった。

以上より、私的空間の【構成的側面】の傾向として、閉鎖や密室的な空間構成は減少の傾向がみられる一方で、建築内に繋がりや連鎖を意識させながら私的空間を構成することにおいては増加の傾向がみられることがわかる。

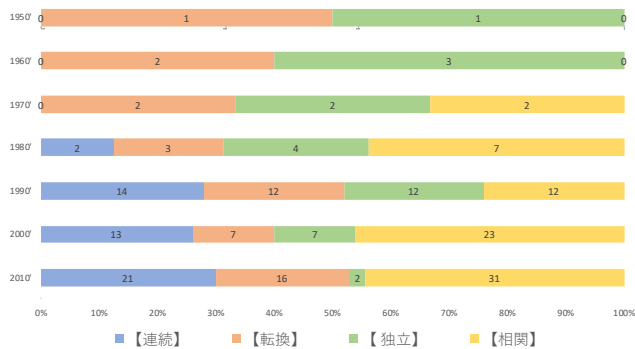


図 4. 【構成的側面】の年代別の変化

4. 私的空間の性質的側面

4-1. 性質的側面の分類

【性質的側面】から私的空間を構想しているものは 91 作品が該当した。さらに抽出された作品について KJ 法より、[空間認知] および [空間体験] に大きく 2 分された。

4-2. [空間認知]

[空間認知] とは、住まい手がその状態や存在について主に知覚より認識することができる空間について設計者が言及しているものとし、〈視認〉、〈光〉、〈自然〉に詳細分類された。ここでは、〈視認〉(17 作品)についての考察を示す。

〈視認〉については、双木洋介の「岩沢の家」(図 5)にみられるような設計者が視線の操作による「見る-見られる」といったような関係性を築き、住まい手の視覚を意識することで私的空間を創作しているものがみられた(24-1, 30-1, 34-1)。また〈視認〉においては、建築内部の色の変化などによる視覚効果により他の場所との差別化を形成することで私的空間を創作している作品もみられた(6-2, 51-3)。

【空間認知】に関しては、感覚的な内容として〈視認〉についての言及が多く見られ、一方で視覚以外の聴覚などといった内容に言及した設計は少ない傾向があった。このことから、私的空間の創作にあたっては、他者からの視線に関しては強く意識されるが、その中での行為の音や気配などに関しては比較的意識せずとも、私的空間が形成されるのではないかと考えられる。



図 5. 岩沢の住宅 (108-1)

4-3. [空間体験]

[空間体験] とは、住まい手が実際に過ごす空間のイメージについて設計者が言及することで私的空間を創作しているものとし、さらに〈快適性〉、〈静的〉、〈多様性〉、〈内密性〉に詳細分類された。ここでは、〈多様性〉(15 作品)についての考察を示す。

〈多様性〉に関しては、山岸綾の「タガイ/チガイ」(図 6)などにみられるような住宅内にバリエーション豊かな室が配置されることで、選択性や散策性を持った空間を住まい手が生活し、居場所を見つけ出すような空間として、私的空間が創作されているものがみられた(45-1, 83-1, 104-1)。また、塚田眞樹子の「すきまアトリエ」(図 7)などにみられるような場の多様性を形成する際に、【構成的側面】における〈連続〉や〈距離感〉といった内容との関係がある作品もみられた(83-1, 87-2, 94-1)。



図 6. 「タガイ/チガイ」(74-3)



図 7. 「すきまアトリエ」(104-1)

4-4. 年代別考察

【性質的側面】の年代別の考察として、詳細な内容別にみると、[空間体験]における〈多様性〉については 2010 年代にかけて増加の傾向がみられた(図 8)。このことから、様々な室の内容を含んだ空

間が創作されることで、その複数の内容を含んだ1つとして私的空間が増えてきているのではないかと考えられる。また一方で、〈静的〉については、私的空間の創作においては1980年代から減少の傾向が見られる。

このことから、設計者が想定する私的空間として、他者との関係性を完全に閉ざしがちな傾向のものから、住まい手の状況に合わせて場を選択できるようなものや、他者との気配を感じつつもパーソナルな領域を確保することを想定しているような空間へと設計者の創作の意識が変化しているのではないかと考えられる。

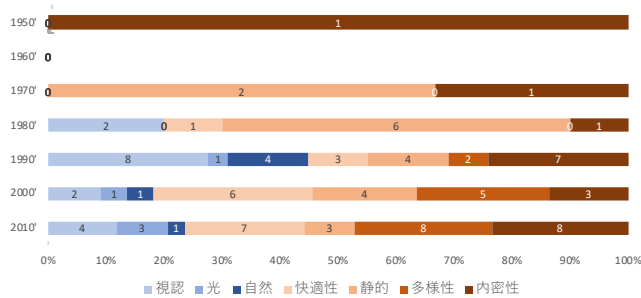


図8. 【性質的側面】の年代別の変化

5. 私的空間の用途的側面

5-1. 用途的側面の分類

【用途的側面】から私的空間を創作しているものとして71作品が該当した。さらに該当した作品について、[明確な用途]および[曖昧な静的用途]の2つのカテゴリーに位置付けられた。

5-2. [曖昧な用途] 28 作品

[曖昧な用途]については、〈用途を想像〉および〈佇む/籠もる〉(図9)の2つに分類された。特に〈佇む/籠もる〉の用途では、空間に対して原初的、静的なイメージとともに言及される作品もみられた(12-2, 50-2, 85-1, 89-1, 89-2)。



図9. 「バーグドルフ映画図書館」(109-1)

5-3. 用途的側面の通時的考察

[明確な用途]および[曖昧な用途]の2つの分類から考察を行うと(図10)、1990年代を境にして、[曖昧な用途]においては増加の傾向がみられることがわかる。これより、私的空間の用途としては、住まい手がその用途を自由に想像するものや、住まい手が明確な目的を持たずに空間を利用することを想定しているものについて増加の傾向がみられ

ると考えられる。

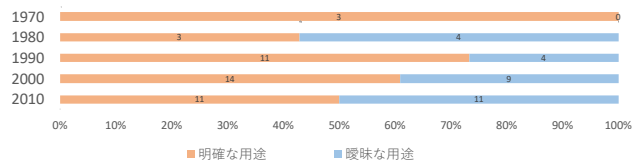


図10. [明確な用途]および[曖昧な用途]における年代別の用途的側面の推移

6. 各側面からみた私的空間の関係

6-1. 【構成的側面】-【性質的側面】の関係

抽出された作品の中で、【構成的側面】および【性質的側面】の両方に該当する60作品からその関係を考察する(表1)。「構成的側面」と「性質的側面」の両側面について多くみられた組み合わせとして、〈連続〉-〈視認〉、〈連続〉-〈多様性〉および〈閉鎖〉-〈静的〉の3つがみられた。〈連続〉-〈視認〉の組み合わせからは、連続する空間を巡るなかで視線が通る場所、遮られる場所がつけられることで、完全に他者との関係を遮断するのではなく、その関係性を弱めることで私的空間として形成していると考えられる。また[連続]-[多様性]においては連続する空間を住まい手が巡ることで多様な場を体験し、いくつかの内容をもった空間のなかの1つとして私

表1. 【構成的側面】-【性質的側面】作品リスト

No.	掲載誌/年	作品名	構成						性質								
			連続	可変性	独立	閉鎖	浮遊	距離感	集積	包含	並列	視認	光	自然	快適性	静的	多様性
1	sk1950_11	豊野の住宅	●														
4	sk1971_10	奥軽井沢の山荘	●														
5	sk1974_02	画家の家	●														
6	sk1980_02	白壁の家	●														
10	id1986_冬	森の家	●														
11	id1986_春	ナウハウス	●														
12	id1987_05	板台の家	●														
14	id1987_09	松見野の家	●														
18	id1988_03	リク・ロコッシュ (請書の家)	●														
19	id1990_03	白の家	●														
20	id1991_03	磯田の家	●														
21	id1991_05	深草の家	●														
24	id1992_11	真法院町の家	●														
25	id1992_11	山坂の家	●														
26	id1993_07	結の家	●														
29	id1994_03	住吉の手の家	●														
30	id1995_01	大島の家	●														
31	id1995_03	グイラ・ノクチュア	●														
34	id1995_11	藤土の住宅	●														
35	id1996_09	南棟大邸	●														
37	id1997_05	W+HOUSE	●														
38	id1997_05	FORMATION	●														
39	id1997_09	大和町の家 川又邸	●														
40	id1997_11	丹沢の家	●														
45	id1999_11	三宅	●														
50	id2000_09	石平の家	●														
51	id2001_01	角地の家	●														
52	id2001_07	HS-house	●														
53	id2001_09	目白通りの家	●														
60	id2004_03	久が原のすまい	●														
66	id2005_09	Nハウス	●														
67	id2005_11	エムハウス	●														
68	id2006_03	美藝科のいえ	●														
71	id2008_03	簡の家	●														
72	id2008_05	cellular	●														
73	id2008_07	鎌倉の家	●														
74	id2008_09	タゾク/チガイ	●														
76	id2009_01	森のフリーハウス	●														
77	id2010_01	シロガネの家	●														
79	id2010_03	機切の家	●														
81	id2010_09	弓張の家-length	●														
83	id2011_01	寂	●														
84	id2011_03	実観の家	●														
85	id2011_03	結ヶ谷の家	●														
87	id2011_11	七つの庭のある住まい	●														
89	id2012_01	待庵の家	●														
90	id2012_05	Kbase	●														
91	id2012_05	青戸の家	●														
92	id2012_11	TU3	●														
94	id2012_11	向日邸	●														
95	id2013_05	今井野の家	●														
98	id2013_09	稲原家の家	●														
99	id2014_07	笠松の家	●														
101	id2014_11	羽根走の家	●														
102	id2015_01	丹波山の家	●														
103	id2015_09	ゆきまアトリエ	●														
104	id2015_09	山野家のコックピット	●														
105	id2015_11	山野市の住宅	●														
106	id2016_05	バーグドルフ映画図書館	●														
109	id2016_09	バーグドルフ映画図書館	●														
該当総数			32	14	6	10	3	12	4	8	6	13	6	3	14	14	15

的空間を形成していると考えられる。このことから、私的空間の【構成的側面】-【性質的側面】の1つの関係として、空間の連続体のなかでパーソナルな領域や空間を確保していることがわかる。つまり私的空間の1つのタイプとして、他者への意識を弱めることで、完全な個室や密室的な状態をつくらずとも私的空間を形成していることが考えられる。

6-2. 三側面の関係

抽出された作品については、【構成的側面】、【性質的側面】および【用途的側面】の三側面を含むものについては、32作品が該当した(表2)。多く見られた組み合わせとして、〈閉鎖〉-〈静的〉-「明確な用途な用途」および〈連続〉-〈視認〉-「明確な用途」がみられることから、該当する作品が少ないため一概にはいえないが、私的空間を形成するタイプとして、住まい手の明確な用途を想定する中で、閉鎖的で静的な場や周囲の音や気配を感じつつも視線の操作により私的空間を形成するもの(図11)の2つが大きなタイプとして考えられる。

6-3. 通時的考察

本研究における抽出された私的空間については109作品であり、年代別における作品数は表3となった。これより、作品総数に対する抽出された私的空間の割合から、建築家が構想する私的空間について作品全体の主題やコンセプトとして語れることは少ない傾向であるが、その割合については、わずかではあるが増加の傾向があることがわかる。また三側面における通時的考察として、表2より、該当数が少ないため一概には述べられないが、2000年代を境に〈閉鎖〉-〈静的〉といった組み合わせだけでなく、〈連続〉-〈視認〉といった内容の空間が現れていることがわかる。

7. 結

本研究により、設計者が構想する私的空間については、閉鎖的に室が閉ざされたものから、他者の存在を感じつつも、パーソナルな領域を確保しようとする考えがみられるものへと変化しているのではないかと考えられる。また【構成的側面】-【性質的側面】でみられた〈連続〉-〈多様性〉や、【構成的側面】-【用途的側面】でみられた〈連続〉-〈曖昧な用途〉といった関係のほか、【構成的側面】における〈連続〉の割合が増加傾向にあることから、現代における私的空間として、空間の連続性が1つの大きな内容となっているのではないかと考えられる。

以上より、建築家の構想する現代住宅における私的空間について、その広がりや変化について総体的に明らかにすることができた。

*1 J A全農

*2 室蘭工業大学大学院 准教授

表2. 【構成的側面】-【性質的側面】-【用途的側面】作品リスト

No.	掲載誌/年	構成						性質						用途		作品名					
		転換		独立		相関		空間認知			空間体験			閉鎖	曖昧						
		可変性	固定性	単体	複体	分離	集合	包含	相列	相列	自然性	多様性	多様性								
4	sk1971_10	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	奥経井沢の山荘			
10	jd1986_冬			●														緑茶の家			
12	jd1987_05																	桜台の家			
18	jd1988_03			●														リヲ・ロッジュ(清里の家)			
19	jd1990_03																	一色の家			
31	jd1995_03																	ヴィラ・ノクチュア			
35	jd1996_09																	南藤希K邸			
37	jd1997_06																	NH-HOUSE			
40	jd1997_11																	丹沢の家			
46	jd1999_11																	HIS			
50	jd2000_09																	小平の家			
51	jd2001_01																	三島地の家			
60	jd2004_03																	久が原のすまい			
66	jd2005_09																	山ノハス			
67	jd2005_11																	山ノハス			
68	jd2006_03																	奥薬科のいえ			
72	jd2008_05																	cellular			
76	jd2009_01																	森のツリーハウス			
77	jd2010_01																	シロガネの家			
81	jd2010_09																	9坪の家: length			
85	jd2011_03																	種々の家			
87	jd2011_11																	七つの庭のある住まい			
89	jd2012_01																	待兼山の家			
91	jd2012_06																	青戸の家			
92	jd2012_11																	TU3			
95	jd2013_06																	今井町の家			
98	jd2013_09																	扇根家の家			
99	jd2014_07																	笠松の家			
101	jd2014_11																	羽根北の家			
104	jd2015_09																	すまアトリエ			
105	jd2015_11																	山野家のウッドピット			
109	jd2016_09																	ハーグドルフ映画図書館			
該当総数		17	5	7	3	8	3	5	2	6	3	2	4	4	3	8	9	7	6	17	15

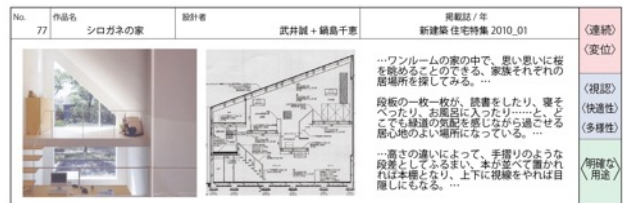


図11. 「シロガネの家」(99-2)

表3. 年代別の私的空間の作品数および割合

	1950	1960	1970	1980	1990	2000	2010	総数
作品総数	101	196	315	677	895	806	612	3602
抽出された私的空間	1	2	2	13	28	30	33	109
割合(%)	0.99	1.02	0.63	1.92	3.13	3.72	5.39	3.03

注

- 1) 岩下久美子『おひとりさま』(中央公論社,2001)「おひとりさま」という表記は、岩下氏が提唱したものである。
- 2) 日本建築学会,建築雑誌,特集「日本のおひとりさま空間」,2015年1月号,p4-5
- 3) 研究資料の範囲として『新建築』については「住宅特集」の連載がはじまった1953年から『新建築 住宅特集』創刊までの1984年における住宅特集掲載月を対象とし、『新建築 住宅特集』については創刊号である1985年から2016年までの奇数月を範囲とする。また対象作品として、本研究では建築内での非コミュニケーションを想定したものを抽出するため、1人暮らしを想定しているものについては対象外とする。これにより、本研究では109作品について私的空間を形成しているとして対象資料とする。
- 4) KJ法とは、川喜田二郎氏によって考案された、何らかの問題提起からの状況把握、そしてそれに対する解決方法の実証検証までのプロセスまでの一連の方法をいう。ここでは上記の中で、ある問題をめぐって関係のありそうな情報を集め、定性的データとし、意味の分かるような全体像とすることを狭義のKJ法としている。川喜田二郎: KJ法、発想法、続発想法(中央公論社)
- 5) ()により明記されている数字は、本研究における作品リストである。